

透析医のひとりごと

「絆」

長澤俊彦

絆きずなは、もともとは動物を繋ぎとめておく綱のことを言うが、もう一つ絶ち難い人と人との結びつきのことを指す。後者の典型例が親と子の絆である。

今年の3月に東日本の大地震、津波、それに付随して福島原発事故という大きな災害があったが、外国のメディアも称賛の報道をしているように、被害に遭われた方々はお互いに助け合って冷静沈着に行動された。これは普段からの人と人とのすばらしい絆が形成されていたからであろう。被災地の透析医療施設も被害を受けられたことと思うが、行政の素早い対応と近隣地域の透析施設の応援を受けて、透析患者さんに迷惑をかけることなく円滑に透析医療が行われたと仄聞している。

ところで、さまざまな医療の中で緊急時と平時にかかわらず透析医療ほど人と人の絆が大切なものはないであろう。患者さんと医療スタッフ、患者さんと家族、あるいは患者さん同士とその絆を数え上げればきりが無い。なぜ透析医療では格段に人と人との絆が大切なのであろうか。それは透析医療が患者さんにとって一生継続する医療であり、医療スタッフにとっては毎日行われる医療行為が一糸乱れぬチームワークを必要とするからである。

私はほぼ40年近く東京三多摩の三鷹市にある杏林大学病院で透析医療を含む腎臓疾患の治療に携わってきた。まだ学校健診や職場健診で検尿が普及していなかった昭和30年代の後半から40年代前半にかけては、慢性腎臓病の発見が遅れて、強い貧血、高血圧、呼吸困難を訴えて夜間の救急外来を受診して初めて、病期が進行し透析治療を必要とする末期慢性腎不全と診断される若者が決して少なくなかった。

当時、多摩地区で透析治療を専門とする施設は数施設にすぎなかった。杏林大学病院も遅ればせながらセンター方式の透析施設を昭和45(1970)年に立ちあげたが、そのころから透析医療を専門に実施する施設が徐々に増えてきた。そこで、杉崎弘章先生をはじめ三多摩地区で透析医療をすでに実施されている数人のパイオニアの施設の先生方が音頭をとって、昭和54(1979)年12月、三多摩腎疾患治療医会を設立し、会の規約を制定したうえで翌年9月に第1回の研究会を開催した。それ以来、年2回の研究会を開いて今日に至っている。

その間に三多摩地区の透析施設は年々増えて、今日(平成23年、2011年)では90施設が会員となり、毎回特別講演のほか10題を超す一般演題の発表が三多摩地区で活動する医師、看護師、臨床検査技師、栄養士からなされ、実にさまざまな有益な情報が提供されている。この会の存在と活動が三多摩地区で透析医療に従事している医療従事者間の絆を広げ、かつこの地域の透析医療の質を向上させることに大いに貢献

してきたことは間違いない。

幸いなことに、まだ東京の三多摩地区では今まで大きな自然災害に遭遇していないが、“備えあれば憂いなし”の格言があるように、施設内のみならず施設間の人と人の絆を大切にして毎日の透析医療に励んでゆきたいと願っている。

三多摩腎疾患治療医会（東京都）

